

C-69 和服地の縫製に関する研究。(第8報) 小学生の縫製能率向上について。
栗立会津短大 佐川澄子

目的. 家庭科の学習は、小学校5年生からであるが、学習時間の不足のため、よくぬえず、各自勝手なやり方で、曲った針目でぬうことが多い。しかしその原因は、児童各自の母指長に差があり、従って用いるぬい針に差があること。更に、基本的な針の持ち方が、充分納得されていないことが挙げられる。そこで、母指長の異なる二つのグループが、ぬい針の長さを変えながら、なみぬいと実験し、長さ、目数、正確率の3点から評価し、母指長に対するぬい針の長さを検討することとした。

方法. 善多方市立オ一小学校5、6年の女子児童132名について、母指長と、指ぬきサイズを測定した。5年生の母指長は 4.0^{cm} ～ 5.9^{cm} に分布し、6年生は 4.3^{cm} ～ 6.1^{cm} の間に分布している。これらを3群に分け、その中の長指と、短指に属する児童24名をいりび、長さの異なるぬい針3種と交互に使用して、なみぬいと実施した。その方法は、1回目自由ぬい、2、3回目は一定時間指導してから行った。指ぬきの太さは、サイズ表の2～11号に至る広範囲なもので、市販品を調整してから用いた。

結果. 中学生、高校生に比較して、一般に成績が低いので、前回までの評価基準を参考に、評価票B案を作って評価した。その結果、長指群は、3/2のぬい針か、長さ、目数、正確率共成績が向上している。短指群では、3/1のぬい針、および、メリケン7番針が正確率の向上によい成績を示した。このことにより、母指長の、63±4%の長さのぬい針か、手ぬいによる、縫製能率を向上させることが、明らかになった。